パウル・ティリッヒ　「宗教の未来」（聖学院大学出版会）
ジェラルド・Ｃ・ブラウアー　編、大木英夫・相澤一　訳

芦名定道（京都大学助教授）

２１世紀を目前にして、現代のキリスト教神学は多くの課題を抱えている。まさにこの時期に適って、キリスト教が直面する困難な諸問題を神学的に考察する手がかりとなる書、最晩年のティリッヒの論文集『宗教の未来』が、良き翻訳者を得て出版された。ティリッヒを研究する者として、またティリッヒの一読者としてこの翻訳の出版を心より喜びたい。ティリッヒの死後３５年あまりたった現代のわたしたちに対して、ティリッヒはこの書においていかなるキリスト教の未来を指し示しているのであろうか。

本書はジェラルド・Ｃ・ブラウアー（当時シカゴ大学神学部長）により編集された論文集でありティリッヒの最晩年の四つ論文（講演）が収録されている。これらの諸論から構成された第二部に先立って、第一部「パウル・ティリッヒに捧ぐ」には、ティリッヒの同僚であり友人でもあるブラウアー、パウク、エリアーデによるティリッヒの人物あるいは思想についての興味深い証言 ── 学生との接し方、人格の豊かさ、東洋の宗教との出会いを通した組織神学の刷新（宗教史の神学の構想）など ── が収められている。これらに編者序文や訳者解説を加えるならば、ティリッヒについて予備知識のない方も、本書によってティリッヒの人となりや思想の特徴などを十分に知ることができるであろう。その点で本書はティリッヒ入門書としても最適である。

いわば本書の本論に当たる第二部には「宇宙探検が人間の条件と態様に対して与えた影響」、「未知の世界」、「進歩の理念の衰退と妥当性」、「組織神学者にとっての宗教史の意義」の四編が収められており、最晩年のティリッヒが新しい神学思想として何をめざしていたかについて多くのことを知ることができる。とくに興味深いのは、現代の科学技術文明の進歩と宗教的多元性の二点に関するティリッヒの議論である。まず、ティリッヒは宇宙探検に示された最先端科学技術が、人間実存の新たな理想像の形成に決定的な役割を果たし得ることを指摘する。科学技術はキリスト者を含めたすべての人類の自己理解に大きなインパクトを与えつつある。しかし、宇宙開発と兵器開発が密接に結びついている現状が変化しないかぎり、科学技術の発展は人類に不安の影を落とさざるを得ない。科学技術による「地球の対象化」「大地の非神秘化」が環境破壊にいかに深く関わっているかは、現代を生きるわたしたち自身が痛感している通りである。ここに「科学者の責任の問題」が存在するとともに、何よりも人類には「越えることの出来ない最終的な境界線」（本質的境界線、永遠なるもの）の自覚が問われているのである。確かに、「未知の世界」へと突き進む科学技術の進歩に対してその限界を設定することは安易になされるべきではないが、「永遠なるもの」を仰ぎ見ることを忘れた文明がどんな運命を辿るかについて、現代人は立ち止まって考える時期にさしかかっているのではないだろうか。ティリッヒは、歴史の中に「潜在力との関連における成熟の過程」と「何か新しいことの起こる歴史における偉大な瞬間（カイロイ）」の存在を認めるが、たとえ科学技術に対してであろうとも「必然的な進歩」を主張するような「ユートピア主義」を断固退ける。

ティリッヒが「神学の未来」について指摘する第二の境界線は、キリスト教とキリスト教以外の諸宗教との間に引かれている。キリスト教神学は従来の「偏狭性」を「東へと越境」し「宗教史の神学」の構築を目指さねばならない。これがティリッヒが宗教多元的状

況を展望しつつ示す道である。はたしてキリスト教は「十字架の出来事」という判断基準を堅持しつつ、正統主義と世俗主義の「イエス中心主義同盟」をいかに突破できるのであろうか。動的類型論や具体的霊の宗教など、ティリッヒの議論は現代の「宗教の神学」にとって多くの示唆を与えてくれる。

ティリッヒが科学技術と宗教多元性などに関して行う議論はその多くがいわばスケッチにとどまっており、その具体化は次の世代にゆだねられている。読者諸氏が本書より現代の歴史的状況の中で「いかに神学するか」について学ばれることを期待したい。